

カール・ポランニーの「複合社会」と国家の役割

—福祉社会における公共性—

(‘Complex Society’ of Karl Polanyi and a Role of the Nation: Public Responsibility in Welfare Society)

笠井高人 (同志社大学大学院)

0. はじめに

『大転換』でカール・ポランニーはポスト資本主義像として、「複合社会」を標榜した。この社会は、資本主義が内包する不可避の崩壊への圧力が発散され、「19世紀文明」が崩壊した後に実現されるべきものであるという。実際の歴史では、彼によって批判された資本主義の姿は、福祉国家として変貌を遂げたが、『大転換』の主題でもある「自己調整的市場」の虚構性は現代社会において、必ずしも解決したとは言えない。福祉国家といえども「自己調整的市場」をもとに作られているため、いわば、今日においてもポランニー的課題が未解決のままとなっている。

「複合社会」は、社会の現実を受け入れながら自由を希求する¹という彼なりの多少特殊な解釈に基づく社会主義を礎に持つものとして捉えられるが、ソ連の崩壊を歴史として経験した我々にとって、社会主義に新たな世界像を求めることは、もちろん有意義と言えない。では、福祉国家を経験した現代における「複合社会」とはいかなるものであろうか。そこで、本報告ではポランニー的課題を解決することによって現れうる「複合社会」概念の現代的意義を考察することをその目的とし、福祉国家群をモデルとした世界像として「複合社会」を解釈する。

1. 「二重の運動」と「複合社会」

ポランニーの「複合社会」像を検討する際に、その概念を「二重の運動」と区別することは重要である。「複合社会」とは、経済的自由主義が社会の細部にまで浸透した「19世紀文明」のような市場経済とは異なった社会のあり方であるが、市場に浸食された人間性を「自己調整的市場」に規制かけることで取り戻そうとするたんなる反自由主義的運動とも異なる。このような市場と人間との拮抗という19世紀の矛盾が生むものは「二重の運動」であって「複合社会」ではない。

「二重の運動」によって説明されるものは、あくまで工場法や労働法などの特定の社会政策がその代表であり、これらの政策の実現は市場の拡大と社会の防衛とを両極に持つ振り子が、後者に振れることで行なわれる。このような、「二重の運動」は「19世紀文明」の内部での事象である。たとえば、ポランニー自身が述べているように、「19世紀文明」とは異なった社会システムを持つと見られたファシズ

¹ Polanyi(1944), p.268 (邦訳 467 ページ)

ム、社会主義、ニューディールも「自由放任主義を顧慮しないという一点においては、類似性をもって
いた」²が、3つのうち社会主義以外は単なる「二重の運動」概念に内包され、市場経済がもたらした困
難に、如何に対応するのかという意味しか持たない。

「複合社会」とは、そうではなく、「二重の運動」を超えて、新たな組織原理が確立することによって出
現されるいわばポスト「19世紀文明」像である。したがって、Joerges and Falke (2011)で検討されて
いるグローバル世界の法などに代表されるポランニーの現代社会への適用は、あくまで「二重の運動」
としての解釈が妥当である。「複合社会」とは「19世紀文明」としての市場社会を経験し、そこで生ま
れる市場の脅威に対処した後に現れる新たな社会として理解されるべきであるのだ。

2. 「19世紀文明」批判としての非交換経済

経済の社会への埋め込みという考えは、ポランニーが「未開社会」分析することによってもたらされ、
なかでも「互酬」と「再分配」という経済のあり方として定式化された。これら「未開社会」の経済の
あり方を指摘した目的は、「自己調整的市場」が基盤とされていることと共に社会的安定が制度化されて
いないという「19世紀文明」の特異性を指摘し、政治と経済との分離を批判するためであった。この特
異性および分離が原因となり「19世紀文明」は崩壊したのである。そのため、2つの問題を解決するこ
とが「複合社会」を実現する手段に他ならない。

「未開社会」では、経済が社会に埋め込まれており、「互酬」や「再分配」といった非交換経済が主流
であった。なぜなら、経済はたんに財を獲得する行為にとどまらず、その背景に宗教や政治権力といっ
た制度が併存しており、経済と政治が一つのものであったからである。たとえば、「再分配」では財を一
点に集める際に政治権力の存在が不可欠であるが、その経済活動を行うことは、当該経済の参加者の政
治的・社会的身分を強化するという機能を持つ。³つまり、首長が存在するからこそ「再分配」経済は成
り立ち、同時に、「再分配」経済を行うことで首長が首長たり得たのである。この身分保障は首長以外の
参加者にとっても同様のことが言え、「再分配」の一翼を担うことで共同体の成員たりえた。いわば、身
分的動機によって経済が行われおり、この動機が「19世紀文明」において失われた原理の一つである。
ここで指摘した社会安定を制度化させる原理は、それが個人的な身分的動機に端を発するにせよ、また
たとえその安定が結果論であるにせよ、個々の社会成員の行動が全体の利益たる安定に寄与していたと
いう意味において、本報告では公共性と記述する。

さて、経済取引の動機による「未開社会」とそれ以降の時代すなわち「19世紀文明」との区分に関し

² *Ibid.*, p. 252, (邦訳 437-438 ページ)

³ *Ibid.*, Ch4

て、所有権の帰属問題として解釈することも可能である。すなわち、「未開社会」は所有権が集団に帰属し、対して「19世紀文明」では所有権が個人に帰属し、それぞれの時代では当該制度が取引費用を最小化させることで、その繁栄がもたらされたとして結論付けている。⁴これは、先に述べた、「未開社会」における経済の身分的動機を取引費用理論に組み込んでいることとなる。

また、経済体制に目を向ければ、「未開社会」、「19世紀文明」、「複合社会」の3区分を、それぞれ前市場社会、市場社会、非市場社会として特徴づけることがこれまでなされた。⁵つまり、交換が中心となる市場経済という「19世紀文明」特殊性が「複合社会」では解決される。したがって、「未開社会」と「複合社会」における経済の在り方という類似点に目を向ければ、「交換」によらない経済によって組織されていた「未開社会」は、未だ遭遇していなかった19世紀文明的課題を克服していたといえる。ゆえに、ポランニーは非交換経済という組織原理を「未開社会」から抽出することで、「19世紀文明」を批判したのである。

非交換経済が主流を成し、所有権の個人帰属が基礎とされる「複合社会」は、「19世紀文明」における公共性で欠如している領域を補完するために、「未開社会」を組み合わせた世界像であると考えられる。そのため、課題は、「未開社会」の知見から浮き彫りにした「19世紀文明」の問題をいかにして解決し、公共性を再現するかにかかっている。

このような解釈をもとにすると、ポランニー論にとってお馴染みの再埋め込みという議論は「複合社会」を標榜することで初めて浮上する。「未開社会」は人間と社会との複合が実現し、生計維持、人間の生活に焦点を当てた実質的な経済によって作られるのであれば、「複合社会」は市場の拡大による人間への攻撃が解消される場であるため、再度、経済が社会に埋め込まれる。もちろん、埋め込みは市場に対する社会主義という意味ではない。⁶市場と人間の調和がとれており、経済が社会に埋め込まれているが、「市場経済の終焉は、けっして市場が存在しなくなることを意味するのではない」⁷ため牧歌的な社会として「複合社会」を描くわけにはいかない。

上で指摘したように、「二重の運動」と「複合社会」とを区別し、さら再埋め込みの議論を持ち込むことで、これまでのポランニー解釈の多くが Ruggie (1982)のように、「二重の運動」での再埋め込みの議論に終始していたことが窺えよう。当然、再埋め込みは「複合社会」でもなされるが、それは「19世紀文明」では欠いていた公共性という組織原理を補完するものであることが要請される。福祉思想としてポランニーを読みとく本報告において、McClintock and Stanfield (1991)で示された危機に面する福祉

⁴ North (1977)

⁵ 小林 (1985)

⁶ Harvey, Randles and Ramlogan (2007)

⁷ Polanyi (1944), p. 260 (邦訳 456 ページ)

国家は「二重の運動」であったが、彼らが示した目指すべき福祉文化としたものが「複合社会」であると理解できる。

3. 自由の認識と個別化の問題—協力を生む社会の認識へ—

「19世紀文明」で欠如していた公共性原理は、先に指摘した身分的動機の他に、国家間の協調を望めなかったものとして協力の概念が挙げられる。協力の問題は、ポランニーが自由の問題を提起する際に用いた西欧人の3つの認識（死の認識、自由の認識、社会の認識）から読み解くことができる。彼によれば、死の認識は旧約聖書で、自由の認識は新約聖書に記されているイエスの教えで、社会の認識は産業社会で生きることで啓示された。⁸

キリスト教はそれまで存在しなかった自由を体現させたが、それは「個別化」を意味し、個人主義という教義をもたらせた。もちろん、この個人主義が「19世紀文明」崩壊の原因であり、ポランニーが鋭く批判した「自己調整的市場」の根底をなすものである。つまり、「未開社会」では存在しなかった「自由」はキリスト教によって作られ、「19世紀文明」においては、各人の協力を人間社会から奪い取ってしまったのである。さきのノースの理論において取引費用の構造を変化させた要因が、このキリスト教による自由の認識である。

ポランニーは、社会の認識によって「自由」の問題を克服することを目指し、とくに、ロバート・オーウェンの社会主義が大きな役割を果たしたと主張する。彼は、「イエスの教えを通して獲得した自由が複合社会には適用し得ない」⁹として、オーウェンの社会主義がポスト・キリスト教世界において協力を実現する場であるとの意味を求めている。キリスト教によってもたらされた個人主義が協力の可能性を排除したという認識に基づくと、ポランニーにとってのオーウェンの社会主義は、キリスト教的課題をも超える公共性の原理であった。「複合社会」においては、社会の認識により、キリスト教の変容と共に協力を実現させる必要がある。

4. 現代における「複合社会」

では、ここまでの議論をもとに現代における「複合社会」を想定し、それを福祉社会として解釈したい。「複合社会」の実現は、「未開社会」での経済に制度化されていた安定を再現することに他ならない。もちろん、これは時計の針を戻すように牧歌的な世界を目指すのではない。McClintock and Stanfield (1991)が指摘したように、福祉国家の危機の原因である介入者の漂流とステークホルダーの拮抗を解決

⁸ *Ibid.*, p.267 (邦訳466ページ)

⁹ *Ibid.*, p.268 (邦訳466ページ)

するのである。これらはそれぞれ、二重の運動と複合社会の区分を行うこと、そして社会の認識に基づく協力によってもたらされる。くわえて、身分的動機、利潤動機にかわる経済の動機が必要であり、これは彼らが言うような義務的なものとして捉えられよう。

そのような現代の「複合社会」における国家の役割とは、再分配機能の設定とその強化を行う福祉政策の実施に集約することができる。再分配の仕組みを作ることはもとより、その仕組み自体を強化することが求められる。通常、福祉政策の議論における「再分配機能の強化」という言葉は、再分配される財やサービスの量的拡大を意味するが、ここでの再分配機能を強化することとは、先にみた「未開社会」のように再分配機能の存続を安定化させるフィードバックの力を強化することである。これは「未開社会」の知見を「複合社会」に回帰させ、安定を制度化することに他ならない。自己強化的なシステムの後押しが、国家の役割であるのだ。したがって、「複合社会」では国家は所得の不平等などの是正の為に、福祉政策をつかって積極的に再分配を直接行うのではない。あくまで、間接的に、再分配システムの強化を行うのである。

再分配機能を強化することで、福祉を提供する共同体を、一時的なもので終わらせず恒久的なものとすることも可能である。すなわち、機能を果たしうる共同体の保護をビルト・インさせるのである。くわえて、再分配機能の存続を安定化させることで、「複合社会」での経済を動機付けるその社会成員としての義務の感情を芽生えさせることも可能となる。

したがって、「複合社会」としての福祉社会における国家の役割は、公共性を作り出す共同体を支援することで、人間の経済に根ざしたかたちで、間接的に、個人が持つ「複合社会」における自由を強化することである。このような思想をもとに福祉政策を形成する必要がある。

5. おわりに

福祉社会として公共性を復活させる場合、国家の役割とはこれまでのように決して所有権を保護したり、再分配機能の拡大を目指したりするだけではない。逆に、公共性を醸成、強化する為に、人類の一体性という自由が拡大する場合においては、キリスト教的な自由を抑制することもポランニーの思想から引き出されうる。彼が示した意味での「19世紀文明」からの転換がなされていない現代社会において、「複合社会」を迎える為にも、各国の福祉政策思想が公共性を強化するものへと変化することが求められる。

参考文献

- 小林甲一 (1985) 「K・ポランニーの経済体制論」『六甲大論集』第32巻第1号, pp.55-66.
- 柳田香織 (2001) 「市場社会の起源と進化—マクロ経済史の書き換えに向けて」杉浦克己, 柴田徳太郎, 丸山真人編『多元的経済社会の構想』日本評論社, pp.185-214.
- 若森みどり(2010) 「ポランニー：社会の自己防衛から福祉国家の哲学へ」小峰敦編『福祉国家の経済思想家たち [増補版]』ナカニシヤ出版, pp.221-231.
- (2011) 『カール・ポランニー：市場社会・民主主義・人間の自由』NTT出版.
- Dale, Gareth, (2010) *Karl Polanyi: The Limits of the Market*, Polity Press.
- Davis, Ann, (2008) “Endogenous Institutions and the Politics of Property Comparing and Contrasting Douglass North and Karl Polanyi in the Case of Finance”, *Journal of Economic Issues*, Vol.42, pp.1101-1122.
- McClintock, Brent and Stanfield, J. R., (1991) ‘The Crisis of the Welfare State: Lessons from Karl Polanyi’, Mendell, Marguerite and Salee, Daniel (edit) *The Legacy of Karl Polanyi: Market, State and Society at the End of the Twentieth Century*, Macmillan Press, pp.50-65.
- North, Douglass C., (1977) “Market and other allocation systems in history: the challenge of Karl Polanyi”, *Journal of European Economic History*, Vol. 6, No.3, pp. 703-716.
- Joerge, Christian and Falke Josef (edit), (2011) *Karl Polanyi: Globalisation and the Potential of Law in Transnational Markets*, Hart Pub.
- Polanyi, Karl, (1944) *The Great Transformation*, Beacon Press (野口建彦・栖原学訳 (2009) 『大転換』東洋経済新報社.)
- Stanfield, J. R, (1986) *The Economic Thought of Karl Polanyi: Lives and Livelihood*, Macmikan.
- Harvey, Mark, Randles, Sally and Ramlogan, Ronnie, (2007) “Working with and beyond Polanyian Perspectives”, *Karl Polanyi: New Perspectives on the Place of the economy in society*, Manchester University Press, pp.1-22.
- Ruggie, John Gerard, (1982) “International Regimes, Transactions, and Change: Embedded Liberalism in the Postwar Economic Order”, *International Organization*, 36, 2, Spring, pp.379-415.